

# 占領地からのラブレター —ベルギー人少女からドイツ人兵士への手紙 (1)—

## Love Letters from the Occupied Territory: Letters from a Belgian Girl to a German Soldier (1)

(翻訳) 小野寺 拓也  
ONODERA TAKUYA

東京外国語大学 世界言語社会教育センター  
Tokyo University of Foreign Studies, World Language and Society Education Center

(翻訳) 西山 暁義  
NISHIYAMA AKIYOSHI

共立女子大学 国際学部  
Kyoritsu Women's University, Faculty of International Studies

原稿受理日: 2019.9.29.  
*Quadrante*, No.22 (2020), pp.255-278.

### 目次

訳者解題

史料 (史料 1~14)

### 訳者解題

今回紹介する史料は、第二次大戦中にドイツに占領されていたベルギーのフランデレン地方に位置する、北海に面したヴェンドウイネ (Wenduyne) に住んでいた少女、マリー＝テレーズ (1924-1990) から、ドイツ兵クルト (1919- フランクフルト出身、工兵部隊に所属) に宛てられた19通の手紙の一部である (ベルリン・コミュニケーション博物館 野戦郵便アルヒーフ所蔵、史料番号: MSPT-3.2014.2083)。手紙の原文はフランス語で書かれており、すべてオリジナルの状態が残されている。一方、クルトが戦後 (1950年) になってからドイツ語に翻訳してタイプした原稿もあり、翻訳の精度はかなり高い。今回は小野寺がそれを日本語に翻訳した上で、西山がフランス語原文との照合作業を行った。



なお、当時クルトはフランス語で返事を書いていた (クルトは学校ですでに8年間フランス語を学んでおり、マリー＝テレーズとの会話もフランス語で行っている) が、その手紙は現存しない<sup>1</sup>。

1940年5月、ドイツ軍のB軍集団はオランダ・ベルギーに侵攻する一方、A軍集団がアルデンヌの森林を突破してソム河口＝イギリス海峡に向かった。そうしたなかでヴェンドウイネに進駐してきたドイツ兵クルトが出会ったのが、ベルギー人少女マリー＝テレーズであった。好奇心旺盛なマリー＝テレーズは、両親

<sup>1</sup> 唯一、1941年10月13日付けでクルトが書いた手紙が残されているが、この手紙が実際に送られたのかどうか、現時点では判断することはできない。

の制止を振り切って外出し、ドイツ軍が陣地を構えている砂丘で偶然クルトに出会う。その後二人は毎日のように会って会話を交わし、史料からもうかがえるように政治的なテーマについて激論を戦わせるなかで、短期間（おそらく一週間程度）で恋に落ちる<sup>2</sup>。しかし6月4日に移動命令が下り、マリー＝テレーズに別れを告げる暇もないまま、クルトはヴェンドウイネを急遽離れることになる。クルトはドイツ軍陣地にマリー＝テレーズへの置き手紙を残し、それを発見した彼女が手紙をクルトに送ることで、二人による手紙のやりとりが始まった。その後クルトはフランスへとむかい、対仏戦終了後休暇を与えられたのち、今度は東プロイセンのティルジットへの移動を命じられて、1941年6月22日、独ソ戦に参加することとなる。

なおベルギー国王レオポルト3世は5月28日に降伏文書に署名し捕虜となる一方、政府はロンドンに亡命して戦争を継続した。そしてベルギーには、フォン・ファルケンハウゼン軍政長官のもと、北フランスとともに軍政が敷かれ、中央政府はその指揮下に置かれた。

本史料の背景として一定程度必要になるのが、フランデレン地方の歴史的な位置づけへの理解であろう。よく知られているようにベルギーは、フラマン語（オランダ語）を話す人々が暮らす北部のフランデレン地方と、フランス語を話す人びとが暮らす南部のワロン地方（さらにドイツ語を話す東部の少数民族）からなる。独立当初は公用語がフランス語とされたことから、フランデレンの人びとによるオランダ語復興運動（フランデレン復興運動）が生じた。その後、司法、行政、教育でのオランダ語の使用許可を認めさせるなど要求を実現さ

せていったが、彼らの不満は根強く、第一次世界大戦でドイツ軍に占領されると、フランデレン民族がドイツ人と同じゲルマン民族であることを背景に、フランデレンの自治や独立を主張する活動家たちが登場した。1930年代になるとふたたびフランデレンの分離主義運動が活発になり、第二次世界大戦でドイツ軍の占領を受けると、フランデレン人民同盟はドイツ軍に協力し、フランデレンと北フランス、オランダを統一する国家の樹立をめざすことになる<sup>3</sup>。

本史料は、そうしたフランデレン地方に住む少女（ただし彼女自身はブリュッセル出身でフランス語を話す）とドイツ兵との、占領地における「出会い」を、少女の視点から生き生きと描き出すものとなっている。第二次世界大戦のドイツ占領地における男女の「性的出会い」については、終戦時のナショナリズムの高揚や、戦後の「対独協力」の政治的、道徳的断罪によって、長らくタブー視され、沈黙が支配してきた。ドイツ兵と交際したフランス人女性が解放時に広場で「丸刈り」にされる姿は写真や映像にも残っているが<sup>4</sup>、その経験は当該の女性やその家族にとって――彼女たちとドイツ兵の間に生まれた子どもたちを含め――、消すことのできないトラウマと葛藤をもたらすことになった<sup>5</sup>。その一方で、（とくにフランスの）文学作品とその映像化においても、第二次世界大戦の記憶はしばしば占領者たるドイツ兵と現地の若い女性の関係性において表象されてきた。その代表的なものとして、ヴェルコールの『海の沈黙』（1942年、映画化は1949年、2004年）やイレヌ・ネミロフスキーの『フランス組曲』（著者が1942年にアウシュ

<sup>2</sup> クルトが1940年晩夏にフランスで記したという自伝的小説には、彼がヴェンドウイネを逢つ直前、二人が会ったさいにキスをしたという記述が出てくる。Kurt, "Eine Flamin", S.102-103. (史料番号は、手紙と同一)

<sup>3</sup> 松尾秀哉『物語ベルギーの歴史――ヨーロッパの十字路』中央公論新社、2014年、113頁。

<sup>4</sup> このドイツ兵と関係を持った女性に対する「象徴的公開処刑」としての「丸刈り」は、すでに第一次世界大戦終戦時においても、フランスやベルギーにおいて行われていた。参照、Debruyne, Emmanuel, "Femmes à Boches". *Occupation du corps féminin dans la France et la Belgique de la Grande Guerre*, Bruxelles, 2018. その一方で、ドイツ兵による女性に対する暴行と、連合国によるそのネガティブ・キャンペーンについては、Horne, John/ Kramer, Alan, *German Atrocities, 1914: A History of Denial*, New Haven, 2001.

<sup>5</sup> 藤森晶子『丸刈りにされた女たち――「ドイツ兵の恋人」の戦後をたどる旅』岩波書店、2016年。

ヴィッツで死去したために未完、死後62年後の2004年に刊行、映画化は2015年)、そして2009年から2017年にかけて7シーズンにわたって放映された大河ドラマ『フランスの村』が挙げられよう<sup>6</sup>。これらに登場する(女性主人公の家庭、職場に宿営する)ドイツ兵は、粗野で傲岸な他のドイツ兵に対し、フランス文化に対する理解や憧れを持ち、音楽に素養を持つ存在として描かれている。これに対し、フランス人女性は、内面に葛藤を抱きつつも、別れの場面の「アデュー」の一言まで対話を拒絶するジャンヌ(『海の沈黙』)から、恋愛感情、関係をもちつつもレジスタンスに身を投じることになるリュシール(『フランス組曲』)、ドイツ兵との子どもを身ごもり、中絶に失敗したのち出産するリュシエンヌ(『フランスの村』)にいたるまで、その描かれ方は大きく変化している。この関係性の描写の変化とその受容は、ナショナルな英雄主義史観的記憶の後退に(時間差を伴いながらも)連動したものといえてよいであろう<sup>7</sup>。

他方、こうした記憶文化の変化に並行して、近年戦争と性に関する歴史研究が蓄積されているが<sup>8</sup>、それらが共通して指摘するのは、戦場や占領地における男女間の権力関係の不均衡である。男性は武器を持ち、軍・当局とい

う権力を背後につけている。さらに男性は相対的に経済力も有している。そのため男性は、女性に対して直接暴力を振るうこともできるし(性暴力)、権力や経済力を背景に女性を利用することもできる(取引としての性)。しかし、権力の不均衡がつねに暴力や性的搾取を生むわけではない。男性は、女性を保護するために武器や権力を利用することもあるし、経済的な不均衡のなかでも合意の上での関係は可能であった。男女間に不均衡な権力関係があることを前提としつつも、そこにはエイジェンシー(行為主体性)が可能であったという主張が、近年の研究ではほぼ一致してなされている<sup>9</sup>。と同時に女性も、敵国の兵士と親密な関係になることで、しばしば孤立感を味わわなければいけなかった。本史料にもあるように、マリー＝テレーズは家族にも親密な関係をひた隠しにしておき、クルトからの郵便は「郵便局留め」にすることで、直接家に届かないようにしていた<sup>10</sup>。

さらに本史料には、さまざまに注目すべき点がある。敵の兵士と親密な関係をもつことへの葛藤、空爆のような戦争暴力への認識、戦時下での生活のありよう、ナチ・ドイツの「民族共同体」観念の受容、女性の「名誉」をめぐる問題、フランスとベルギーとの微妙な距離

<sup>6</sup> 『フランスの村』については、剣持久木「映像の中での公共史——「フランスの村」にみる戦況期表象の現在」同編『越境する歴史認識——ヨーロッパにおける「公共史」の試み』岩波書店、2018年、23-51頁。映像作品におけるフランスの戦時占領期の表象全般については、Attack, Margaret/ Lloyd, Christopher(eds.), *Framing Narratives of the Second World War and Occupation in France 1939-2009. New Readings*, Manchester, 2012を参照。

<sup>7</sup> 一方で、ドイツにおいても、戦争末期ソ連軍が近付く東プロイセンの地主貴族の女性を主人公とするテレビ映画『逃避行 *Die Flucht*』(2007年)では、幼馴染の婚約者をもつ主人公がフランス人の戦争捕虜と恋に落ち、一度別れたのちに戦後連合軍の一員として再会するというストーリーが展開し、「男性的ドイツ」と「女性的フランス」という従来の典型的な描かれ方とは異なるものとなっている。『フランスの村』と『逃避行』を記憶文化の変化の例として論じるものとして、以下を参照。Gilzmer, Mechthild, "Neue Bilder für eine alte Beziehung. Oder über alte Leidenschaften im neuen Gewand", in: dies. u.a. (Hg.), *50 Jahre Elysée-Vertrag (1963-2013). Traditionen, Herausforderungen, Perspektiven*, Bielefeld 2014, S.65-78.

<sup>8</sup> 代表的なものとして、以下を参照。メアリー・ルイズ・ロバーツ、佐藤文香・西川美樹訳『兵士とセックス——第二次世界大戦下のフランスで米兵は何をしたのか?』(明石書店、2015年)；レギーナ・ミュールホイザー、姫岡とし子監訳『戦場の性——独ソ戦下のドイツ兵と女性たち』(岩波書店、2015年)；茶園敏美『パンパンとは誰なのか——キャッチという占領期の性暴力とGIとの親密性』(インパクト出版、2014年)；Röger, Maren, *Intimität, Gewalt und Prostitution im besetzten Polen 1939 bis 1945*, Frankfurt a.M., 2015.

<sup>9</sup> 参照、小野寺拓也「『戦場の性』翻訳を終えて」『西洋近現代史研究会会報』第31号(2016年)、35-38頁。

<sup>10</sup> なお、クルトにとってもベルギー人女性との文通はリスクがなかったわけではないようで、東プロイセンのティルジットにいた1941年5月、中隊長に呼び出され、この文通によって情報を外国人に漏らしたのではないかと、ゲシュタポからスパイの嫌疑がかけられていることを告げられ、叱責を受けている。Kurt, a.a.O., S.164ff. この場で中隊長から、彼女との文通を即座に止めるよう警告を受けており、彼も文通停止を約束している。その後(終戦後に再開するまで)文通が途絶えたのはこれが原因である。



感など、本史料から知りうる事柄は多い。また、そうした歴史的な史料としてだけではなく、『アンネの日記』と共通するような、家族との距離感、「友人」とは何か、男女間の駆け引きといった、思春期の少女のみずみずしい思索も、ここからは読み取ることができる。そうした意味で本史料は、歴史を知る史料としても、そうした「普遍的」なドキュメントとしても価値が高い。

さらに付け加えれば、先述の通り、近年ジェンダー、セクシュアリティの視点から研究が活発になる一方で、当事者の当時の認識、感情を示す史料は極めて限定的にしか存在していない、という点を考慮しなければならない。かりに存在していたとしても、彼女ら、彼らが終戦時、戦後置かれた状況を考えれば、日の目を見ることなく破棄、あるいは隠匿されたものが少なくなかったことは容易に想像できよう。そのため、研究においては、オーラルヒストリーや回想録に依拠するところが大きくなる<sup>11</sup>。これらの史料はそれ自体貴重であるが、同時に当時を忠実に再現したものではないこともまた事実である。さらに、この手紙が女性側の視点から書かれた史料であるという点も強調したい。戦時郵便で取り上げられるのは多くの場合兵士を書き手とするものであり<sup>12</sup>、兵士が受け取った手紙、ましてや占領国の女性から送られたものが分析の対象となることはまれである。こうした女性視点の「同時代史料」は、ステレオタイプの受容と逸脱を検証するうえで貴重なものと言えるであろう。

そして最後に強調しておきたいのは、今回の史料はあくまでベルギー人少女の視点から

のものではあるものの、そこにはベルギーとドイツという二つの視点のなかで葛藤する彼女の姿勢がつねに見られ、その意味で「複眼的視点」を一つの史料のなかで体感できる、という点である。したがって、本史料はたんに研究者が過去を研究するうえで一次史料として用いることができるだけでなく、教育現場（大学ないし高校）で適切な「問い」を提示しながら用いることで、戦争という出来事を一人称の視点で身近に、自分の問題として考えつつ、「複眼的視点」を意識することができるのではないかと、訳者二人は考えた。今回『クアドランテ』誌上での翻訳を行う意義も、そこにある。つまり、貴重な一次史料を紹介することで歴史研究の刺激となるだけでなく、教育での史料の活用という、現在のところあまり（とくに西洋史領域では）進んでいない試みを促進するということが、訳者たちの願いである。

したがって今回はまず戦時中の手紙を取り上げ、次回は戦後にマリー＝テレーズからクルト宛に送られた手紙を紹介する（なお、両者の文通はマリー＝テレーズの死まで続いた）。そのうえで第三回には、この手紙を教育現場で史料としてどのように活かせるのかということについて、小野寺と西山が共著論文で考察する予定である<sup>13</sup>。

なお、史料中の亀甲括弧は訳者による補遺である。また個人情報保護のため、姓は（脚注における史料の出典も含めて）すべて伏せた。

<sup>11</sup> フランスに遅れつつも、近年第二次世界大戦時のドイツ兵とベルギー人女性の関係、そして彼らの間に生まれた子どもの研究が進められている。Swillen, Gerlinda, *Der Zweite Weltkrieg ist unsere Wiege. Eine ostbelgische Geschichte. Mit Zeitzeugenberichten von Wehrmacht- und GI-Kriegskindern*, Eupen, 2019.（著者は研究者であると同時に、テーマとなる国防軍兵士とベルギー人女性の間に生まれた子どもの一人である）。また、終戦時制裁を受けたベルギー人女性の回想録として、Schulmeister, Valentine, *J'ai failli être tondu*, Boulleret, 2014. ドイツ兵の恋人の姓を仮名とする著者は、すでに半世紀前の1964年に回想録を死後に出版することを条件に知人に預けていたという。

<sup>12</sup> たとえば、フランスに滞在したドイツ兵の野戦郵便や日記を集めたアンソロジーにおいて、フランス人女性との交際に言及したものが二点掲載されているが、そこには、こうした恋愛関係の証言は稀であるとの編者の注記がある。Luneau, Aurélie/ Guérout, Jeanne/ Martens, Stefan, *Comme un Allemand en France. Lettres inédites sous l'Occupation 1940-1944*, Paris, 2016, pp.156-7.

<sup>13</sup> 理論的な準備考察として、参照。西山暁義「外国史教育における複眼的史料集の可能性——ドイツの歴史教育と近現代史の例から考える」『共立女子大学・短期大学総合文化研究所紀要』26（2020年）刊行予定。

## 【史料】

## 〈史料 1〉

ヴェンドウイネ 1940年6月4日  
夕方6時（ドイツ時間）

## 親愛なるクルト

私がこれほどあなたのことが気にかかっていたなんて、わからなかった。今あなたがいなくなって、そのことが自分でもわかったの。陽の光はあまりに熱すぎるし、風は私の邪魔をしてくるし、海は冷たすぎるし、砂丘は高すぎる。そして今、あなたはいない。ああ、わが友、Chateau Solitude（閑静宮）<sup>14</sup>には悲しいほどに誰もいないわ。

昨日の夜、私が家に戻ってくると、兵士はみんなヴェンドウイネから出発したって、お父さんが話してくれた。私はそれを信じたくなかったし、私はもう外に出ることができなかったから、それが本当かどうかあなたに尋ねることもできなかった。明日の朝きっと会えるんじゃないかって思ったから。でも、なんということ！昨日の夜の9時半、兵士全員がヴェンドウイネから出発した。だから私は、もうこれでおしまいだわ、あなたにはもう長いこと会えないと自分に言い聞かせた。夜の間ずっとバルコニーにいて、あなたをもう一度見つけられるんじゃないかと願ってた。そして私は正しかった。あなたは最後のグループと一緒に、最後の一人としてやってきた。私はあなたに挨拶したし、あなたは私に答えてくれた。でもすごく暗かったから、私のこと見つけられたかしら？あなたは戦友たちと一緒に教会の向こう側までいってしまって、私はもうあなたたちを見られなかった。そのあと私はベッドに横たわって、長いこと泣いた。下で大きな車が通り過ぎる音が聞こえたわ。

今日の朝私が一番最初にやったことといえ

ば、あなたがちょうど立ち去ったばかりの「閑静宮」に自転車で行くこと。でもそこであなたの手紙を発見して、私はとてもうれしかった。そこには、いろいろあるけどあなたは私のことをちょっとは愛してくれているって書いてあった。あなたは〔手紙の中で〕書いてたけど、私はもう一回泣いた。だって、とってもうれしかったから。でも、すぐその気持ちも終わった。あなたは行ってしまったのだし、なによりあなたが戦争へと引っ張られたのだから。ええ、自分の祖国のために戦えるっていうのは、とても素晴らしいことだし、あなたに説明したように、私だって自分の祖国のためなら喜んで戦いに赴くわ。でも残念なことに少女なので私は戦いに参加できないの。

親愛なるクルト、戦争が終わったらまた来てくれることを願っているわ。ええ、危険がどういふものかあなたはすでに知っているし、あなたはそれを乗り越えた。これからもきっと乗り越えていけると思う。あなたは、自分がクリスチャンだって話してくれたわね。だから、私は毎日神様に、あなたや私の友達全員がこの戦争で殺されたりしないようお祈りするつもり。ええ、あなたは私にとって私の親友の一人。クルト、ジョゼ、アンドレ……。みんな同じよ。みんな愛してる。あなたたちはみな私の兄弟なの。どこで生まれたかなんて、どうだっていいことよ。

今日の朝、私はいっぱい泣いたし、お母さんがそれを見てた。どうしたのって聞いてくるから、砂が目に入っただけって私は答えた。午後には仲の良い女友達<sup>15</sup>と2時間、閑静宮にいた。上にはまだ誰もいなかった。彼女は、そこがかなり遠いと思ったみたい。私はそこ、砂丘のてっぺんで昼寝した。そこで思ったのは、あなたが私の隣にいたならってこと。でも私が目覚めると、現実はどうじゃないってことに気

<sup>14</sup> 砂丘にドイツ軍がつくった陣地跡のこと。クルトによれば、この陣地を「閑静宮」と名付けたのは彼自身である。Kurt, *a.a.O.*, S.29.

<sup>15</sup> マリー＝テレーズの親友であるウージェニーのこと。参照、*Ebd.*, S.117-8.

づいた。ほかのドイツ人が戻ってくるまで、毎日私たちのお城〔閑静宮〕に戻ってこようと思う。それから森に行って、あなたについて考えごとをするつもり。

親愛なるクルト、短い時間だけでもあなたのことを幸せにできて、とてもうれしかった。全世界のことを幸せにできるなら、喜んでそうするつもりよ。世界ではなぜ、人間が兄弟のように愛し合うんじゃないかって、いつも争わなければいけないのかしら。そうすれば、人生って本当に素晴らしいものになるのに。戦争もなく、いたるところで喜びや平和、幸せがあればいいのに。ああ。あるのはいつも嫉妬ばかりよ。

最愛の人、私約束するわ。どんなことがこれから起ころうとも、あなたのことを決して忘れないって。だからあなたも、あなたの小さな〔かわいい〕女友達をすぐに忘れないでね。時間があったら、手紙を頻繁に書いてね。写真はもってないからあなたに送れないけど、いいのが手に入ったらあなたに送るわ。あなたは今どこにいるかと、自問自答してる。たぶんフランスね。そうじゃないといいんだけど。そこであなたは戦わなくちゃいけないから。ああ！あなたがここ、あなたの「閑静宮」に戻ってこれたら、私たちどんなに幸せなことか。でもすべては過ぎ去っていくし、すべてには終わりがある。それが運命よ。あなたはいなくなったけど、あなたはきっと戻ってくるわ。

私がすごく悩んでいるのは、ちょっと別のこと。たぶんあなたがこの手紙を受け取ることはないわ。だって、私はあなたの住所がもうわからないんだもの。あなたの〔野戦郵便〕番号をなくしちゃったの。その番号は写真に書いてあったんだけど、その写真はマツの森のなかで見失ってしまった。それを見つけられなかったし、それ以外にどこにもメモしてなかったから、手紙がどうやったらあなたに届くか自問自答したわ。あなたが手紙を受け取れないと、私があなたのことを忘れちゃったんじゃない

か、もしくは私があなただのことをからかってるんだと思うでしょうね。そして私に対してすごく腹を立てると思う。

昨日あなたの手紙を砂丘で見つけたとき、あなたは自分の番号をそこに書いてあるのだとばかり思ったわ。でも不幸なことに、住所はまったく書いてなかった。私の記憶をずっとたどっていくと、番号の中に「9」という数字があったということ思い出した。閑静宮に行ってみると、一枚の絵はがきの断片があって、そこには「8916」という数字があった。一文字目は読めなかったけど、それは「1」だったと思う<sup>16</sup>。でもそれがあなたの番号なのか、ヴィルヘルム〔クルトの戦友〕の番号なのかはわからない。あなたの番号だといいんだけど。

親愛なるクルト。手紙を中断しなくてはいいわ。今日は1940年6月5日。「閑静宮」から書いているわ。〔略〕今日天気はすごくいい。そこにあなたがいないっていうのは、すごく残念。絵はがきの断片をさらに探したけれど、ほとんど見つからなかった。あなたがそれをビリビリに破いたのは残念だったわ。だって、その絵はがきがあなたのものかどうか、番号が正しいかどうか私にはわからないんだもの。もし再びヴェンドウイネに行くことがあったら、ドイツ兵に手紙を渡そうと思う。あなたが受け取ってくれることを、心から願っているわ。でも、手紙を受け取ったらすぐに返事を書いてね。字が汚くてごめんなさい。ペンがよくなって、しかも膝の上で書いたから。じゃあね、最愛の人。あなたのことを、優しく抱きしめているから。

あなたの小さな〔かわいい〕ベルギーの友人、マリー＝テレーズより。

<sup>16</sup>「18916」は当時、第52工兵大隊第1中隊に割り当てられていた野戦郵便番号。



## 〈史料 2〉

ヴェンドウイネ 1940年8月14日

## 親愛なるクルト

あなた、おそらく思ったでしょう。私があなたのことを忘れたって。だって、あなたに前に書いてからかなり時間が経っているから。でもそうじゃないわ。毎晩寝る前、私はバルコニーに出て、フランスの方角を見ているし、「おやすみ」ってあなたに言っているわ。そして昼間にコーク<sup>17</sup>の方角〔西〕へ散歩をするときには、閑静宮まで行って、あなたについてちょっと考え事をするの。かわいそうな閑静宮!元の姿はほとんど何も残っていないわ。あなたがなくなった月曜の夜、私は寝られなかった。泣いてたから。火曜の朝、私は自転車に乗って、自分が夢でも見たんじゃないのかと確認しにいった。ええ、事実だった。あなたがもうここにいないことは明らかだった。でも、ああ!だれもない。手紙だけ。私はそれをむさぼるように読んだ。すごく悲しくなって、すぐに家に戻った。気晴らしをするためにラジオをつけたけど、「Alone!」という曲が始まったばかりだった<sup>18</sup>。あなたがメロディを知っているかどうかかわからないけど。すごくきれいな。でも私の悩みが消えるどころか、歌のせいでさらに悲しくなったわ。

一週間以上わたしはさまよい歩いた。途方にくれてさまよったわ。そしてすべての自由時間は閑静宮で過ごした。毎日花をそこまでもって行って、水につけた。携帯用のガソリン・タンクの中なんだけれど。ある夜、すごく強い嵐があって、次の朝に行ってみると、陣地には何も残っていなかった。木の枝や砂嚢がごちゃごちゃに積み上がっていて、砂がそこに吹き付けてた。砂丘も形が変わってしまっていた。そこで私は片付けをして、マツの枝や砂嚢を掘

り出して、地下壕を露出させた。次の朝はシャベルを持って行って、砂をかきだした。何日間も作業して、この小枝をたばねて、すべてをひもで結わえた。でも一週間後、また嵐が来て壊れてしまい……。すべてが新たに壊された。私は自分につぶやいたわ。おしまいね。もう十分。私たちの愛する閑静宮で残っているのは、何本かの枝だけ。でもよく私はここに戻ってきて、何時間か過ごすの。たぶんいつの日か、私たちは一緒にそこに戻ってこれるわ。その日を待ち焦がれているわ!

じゃあちょっと別の話題。あなたが出発してすぐあと、6月11日に私の祖母が亡くなったの。私たちの兄弟の一人はまだフランスにいる、モンペリエ近郊のクレルモン＝レローってところ(非占領地)。そこで彼は兵士としての生活を送っていて、家に戻れる日を辛抱強くまっているの。彼からの便りをよく受け取るわ。彼にももう一度会いたい。かわいそうな彼は、そこでは何も食べるものがないそうよ。

そしてあなたはどうか? 健康状態はどうか? 私と同じくらい順調? わたしはまだ痩せてないわ。でも冬のことは心配。だってすでに今の段階でも、バターもマーガリンも油脂も、そういったものはほとんど手に入らないから。でもジャムだけはまだあるのよ。

親愛なる友。私があなたにあまり手紙を書かなかったのは、あなたの住所を知らなかったから。写真と一緒に住所もなくしちゃった。閑静宮で絵はがきとともに一つの番号をみつけたとき、それはあなたのものか、もしくはヴィルヘルムのものだらうと思ったし、念のためにその住所宛で手紙を送ったの。そしてあなたはそれを受け取った。私って探偵としても悪くないんじゃないかって思うわ。それが本当にあなたの番号だったんだもの。でもあなたに手紙を書く勇気が、いつもなかった。だって、

<sup>17</sup> ヴェンドウイネ近郊にある、同じく北海に面したベルギーの町、デ・ハーンのこと。ヴェンドウイネから西に数キロ行ったところにある。

<sup>18</sup> おそらく、1935年のハリウッド映画『オペラは踊る A Night at the Opera』に登場する曲だと思われる。

手紙が途中でなくなるかもしれないって怖かったから。それに、あなたから手紙は全然来なかったし。私がコーク〔の郵便局〕に行っても、郵便は届いていなかった。そして、列車が再び動くようになるまで、局留めの手紙は輸送されないっていう話を聞いた。がっかりしたわ。

7月の終わり、私はヘントに電車で行った。そしておととい、もう一回コークに行こうと決心したの。郵便局で私宛の二通の手紙を見つけたときの私の喜びがどれくらい大きかったか、あなたには想像もできないでしょうね。カウンターの向こうにいる太った女性を抱きしめたくなったくらいよ。そのあと自転車で閑静宮まで行って、そこであなたの手紙をむさぼるように読んだわ。

親愛なるクルト。フランスでの戦争が終わったというのは、とてもうれしいわ。だって、あなたのことを心配していたから。戦闘で負傷したり、もっとひどいことになったりしなければいいって思ってた。そんな胸苦しさからようやく解放されたし、あなたがイギリスに行くことになったりしないよう願っているわ。最愛のあなた、あなたはもう十分戦ったでしょう。フランスでゆっくり休んで。あなたがそこ〔フランス〕にとどまっていれば（私からは遠いところだけれど）いいんだけど。イギリスには行かないで。あなたのこと、こんなに心配しているのよ。でも、あなたの帰還を私が望んでないなんて思わないでね！ 戦争の残りの期間、あなたがここに戻ってくることをどんなに望んでいるのか。これからどうなるかなんて、誰にもわからない。たぶんあなたは私たちの海岸に戻ってくるわね。だって、いまここにいる〔ドイツ〕兵たち（砲兵）はディジョンから来ているというし。フランスのかなり内陸部よね。

あなたの手紙から、あなたがバニユー〔パリ西部近郊のコミューン〕にいたことがわかったわ。パリ近郊ね。あなたはそのあたりにいるの？ あなたの旅行のお供ができないのが

残念だわ。フランスも見てみたいし、あなたと一緒に自然の素晴らしさにため息をついたりしてみたいものね。あなたたちがフランスよりもベルギーで良い振る舞いをしたっていうことを知っても、まったく満足なんかしていないわ。何て恥ずべきこと。親愛なる友。あなたがフランス兵捕虜を監視しなければいけないときは、黒人であろうとそうではない人びとであろうと、私に対してと同じよう親切にしてね。そうしてくれる？ だって、あなただってわかると思うけれど、彼らだって同じ人間で、私たちと同じように感じたり苦しんだりするの。〔略〕

我が友。私は閑静宮にいます。私たち、政治についてたくさんお話をしたけど、勝利にもかかわらず私の考えは変わっていないし、圧倒的な最終的勝利をまだ信じているわ、結局のところ。わかる？ あなたがもう二度と、決して戦わなくていいって知ってうれしかったし、そのことは忘れてはいないけれど、それにもかかわらず私の考えは決して変わらないし、あなたの国籍に対して私がけっして誇りに思わないだろうっていうことも分かってもらいたいって、私は願っています。ええ。あなたの兵士としての立派な態度については素晴らしいと思っているけれど、まったく同じように自分の義務を果たしたあなたの捕虜についてもそれは同じだわ。そして、神様もこの点では私と同じように考えているって、私は確信してる。でもストップ！ 私たちの手紙のなかで政治についてお話するのはやめましょう。私はあなたを愛している。それが全てよ！〔略〕

あなたがどこに宿営しているか、すごく興味がある。だって、そうすれば頭の中であなたと一緒に旅行している気分になれるから。私の女友達には手紙を書かなくていいわよ。「ベルギー、コーク＝シュル＝メール 郵便局留め」でちゃんと届くから〔略〕。

たぶん私の長いおしゃべりで、きっとあなたを退屈させてしまったことでしょうね。最愛の人。6月3日の月曜日と同じように、私はあな



たのことを愛しています。でも、あなたのために私が変わると言うことは決してありません。いいえ。あなたが言っていたように、今は私たちの国籍について考えないようにしましょう。いいえ。私たちは一生涯の兄弟・姉妹なのです。そしてあなたなしで幸せになることはないでしょう。

あなたの小さな〔愛しい〕 マリー・テレーズ  
XXX

(二度と「君のド〔イツ人〕の友 Ton ami  
All... より」なんてサインしないで。腹が立つから)

〈史料 3〉

ヴェンドウイネ 1940年9月30日

9月29日、あなたの6月28日の手紙を喜びとともに受け取りました。ちよっぴり遅いとは思いました。私と同じくらい長く待たなきゃいけないとすると、あなたはいつも古い手紙を受け取ることになるわね。まあしょうがないんだけど。私があなたの手紙を受け取ったときの喜びといたら、あなたには想像できないでしょうね。私があなたから受け取った三通目の手紙よ。写真も入っていたわ。すごくうれしかった。姉が撮ってくれた最初の写真も送ります。あなたが私の一通目の手紙を受け取ったとわかって、すごくうれしい。あなたに届かないんじゃないかと恐れていたから。あれ以来、私は手紙を二通と絵はがきを二通書いてます。これらも届くといいんだけど。8月には、6月初頭の手紙一通、7月20日の手紙一つ、そして今6月の手紙を受け取ったというわけ。

わが最愛の人。私が泣いたからって、あなたが良心の呵責に苦しむ必要はないわ。すべてはいつか報われるに違いないんですから。今ようやく私がわかったのは、私があなたと一緒にいるときどんなに幸せだったのかということ。この月曜日の午後には、自分の幸せをまだ理解していなかった。今や、すべては手遅れ……。でも将来に希望をつなぐわ。たぶんいつの日か再会できるし、幸運も私たちにいつか微笑むと思う。だって私はいつも愛しているから。これから私の身に何が起ころうとも。あなたはずっと、私のクルト兄さんでいるわ。だってあなたは単なる友達以上の存在だから。だって〔ただの〕友達なら私たちのことをすぐ忘れてしまうでしょうし。互いに会ったりしているときには繋がっていても、10日もいなくなるとう忘れてしまって、ほかの女の子たちと付き合っちゃうものよ。

最愛の人。あなたに感謝してます。だって、

あなたは私のことまだ愛しているって信じているから。だって、あなたが手紙で書いてくれたように、私はあなたのこと信頼しているから。そして、私たちは離れていても、あなたのことをずっと信頼できるって私は思ってる。私にはたくさん友達がいるけど、信頼できるって信じられるのはあなただけだと思う。それは、昔みたいにあなたが楽しんじゃいけないって意味じゃないの。いいえ、あなたは自由。だって、私は自由を心の底から崇拜しているから。私に何か命令してくれればいいの。私は逆のことをやるから。おわかりのように、私には「ベルギー人としての」欠点があります。私たちが知り合った数日間、あなたはそのことにきっと気づいたに違いありません。でも私はあなたをおしゃべりで退屈させちゃうのよね。許してね、親愛なるお兄さん（変な言い方だけど）。

あなたが健康で無事に「フランスの戦い」から戻ってきたことを、とてもうれしく思います。戦争が終わったあとも、あなたが自分の家を去ったときと同じように健康で家に帰れるよう、毎日祈ってます。あなたたちは橋を架けたと書いてくれましたね。とってもいいことね。だって、民間人にも軍人にも役に立つものだから。でも、あなたが英仏海峡の間に橋を架けるのは嫌だわ。だってあそこは幅が広いし、深いし、橋は何の役にも立たないから。ええ、家にお戻りなさい。そして戦場から離れて休息を取り、私のことも時々考えてね。

あなたは年をとったと、書いてくれたわね。そう思うわ。ヴェンドウイネであなたと知り合ったとき、あなたが送ってくれた写真よりもずっと男らしい顔つきだった。すごく若く見えた。——あなたがフランスにいるフランス人にもベルギー人にも親切だったこと、感謝しているわ、我が友。すごく、すごくいいこと。だから、長いキスを送ってあげる。あなたがかつて素晴らしいことを言ってくれたわね。わたしたちはみな人間、つまり兄弟なのだと。私の友達のところに行くことがあったら、親切にしてね。

残酷なことはしないで。私のためだと思って。約束して！

あなたが私のことをよい天使だと思ってくれているのなら、私とてもうれしい。だって、私はおてんば娘（ずる賢い女）だってみんな言うんですもの。〔略〕

本当ならあなたに毎日手紙を書きたいんだけど、無理なの。だってそうしたら、さらにあなたを退屈させちゃうから。でも次の手紙では、イギリス軍の空爆（ここ一週間、ここには来てないけど）とヴェンドウイネでのドイツ兵の生活について書くつもり。あなたのところのドイツ兵とはどう違うかしら。〔略〕

〈史料 4〉

ヴェンドウイネ 1940年10月15日

わが親愛なるクルト

おととい、ドイツからのあなたの手紙を受け取りました。本当にありがとう。とくに写真は、すごくうれしかった。ご親切にどうも。〔略〕

あなたが私に送ってくれた写真、とてもうれしかったです。あなたは民間人の服を着ているよりも、軍服姿のほうが好きだわ。民間人の服だと、ほとんど子どもみたい。いちばん気に入ったのは、砂丘にいたところの写真。だってそこは、私が犬と一緒に平地から〔砂丘へと〕よじ登っていったとき、はじめてあなたと出会った場所だから。そしてあなたは私に対して上機嫌に「ハロー」と挨拶してくれた。あなたが私と知り合いになったのは、この呼びかけのおかげ。だってそれがなかったら、私はあなたの方を見なかったと思うから。でも「ハロー」はドイツ語でもなければフラマン語でもなく、フランス語でもなく、つまり……。堡壘の写真はとてもきれいだし、砂丘や海の写真もきれい。私にとっては、1940年の戦争とあなたへの本当に美しい記憶だわ。あなたの言う通り、私は写真ですごくいしかめっつらをしているわね。あなたがなにをしでかすかって、ちょうど考え込んでたのよ、お兄ちゃん。カメラを一台手に入れたわ。写真を撮ってもらって、あなたに送るわ。

〔中略〕見て！ イギリスの機体があそこを飛んでる！ それに向けて砲撃が。あれはおそらくザウテ〔ヴェンドウイネから約20キロ東にある北海沿岸の町〕のあたりね。

「グッド・イブニング、マイ・ボーイ」。今日の夜、あなたの爆撃で私のベッドに何も落とさないでね。ちゃんと眠りたいから。

〈史料 5〉

1940年10月16日

〔略〕親愛なる、大きな（大きすぎるってわけじゃないけど）お兄さん。あなたが来られないのは残念だわ。だって、あなたに話さなきゃいけないことたくさんあるんだもの。とくに、今何が不可能なのかってことについて、ぜひ議論したいわ。〔略〕

あなたは兄として模範よ。だって私に親切にしてくれるんだもの。あなたからぶたれたり足で蹴られたことはないわ。実の兄弟とは違って。あなたが彼らみたいに私のことをからかったり、キャンディや香水の瓶を私から盗んだりするとは思わない。彼らはそういうことをするのが好きなの。ええ、あなたはそんなことはしないと思う。でも政治という点では、彼らよりあなたのほうが私をいらだたせます。でもそれについては、どうすることもできない。あなたの性格には欠点があるけれど、私の愛する兄としてあなたを受け入れるわ。

あなたがフランスにいるわたしの同胞に対してしてくれたことについて、もう一度感謝します。フランス人とベルギー人の関係については、私も長いこと知っています。フランスが降伏した一週間後、彼らは私たちを北からのB…〔Boches、ドイツ野郎〕呼ばわりしました<sup>19</sup>。一緒になったフランス人全員に、それがどういう意味なのか質問しました。彼らはそれについて私を信じようとせず、私たち〔ベルギー人〕はつねに彼らの友であると言っていました。そうなのは〔私たちベルギー人のことを見下したり、差別しているのは〕北のフランス人である。彼らもつねに私たちに好意を持っているのだが、残念なことに、私たちのところにも、彼らのところにも裏切り者がいる。問題はこういう連中なのだと。だから、私は彼らみんな

<sup>19</sup> 第一次世界大戦において、ベルギーからの難民が北フランスの住民とともに進軍するドイツ軍から逃れてきた際、当初は歓迎されたものの、その後戦争が長期化するなかで、避難民やその出身地の住民に対する不信や不満が高まり、「Boches du Nord」（「北のドイツ野郎」）と呼ばれることもあった。とくにベルギーの場合、フラマン語圏の住民に対して、このような疑念や偏見が強く向けられた。



なを許しました。そういうこと。ところでフランスにいた私の友達が言うには、彼ら〔私の友達〕が歓迎された街もあるとのこと（残念ながら、そうではない人たちもいたとのこと）。だから、わかるでしょ！ まあ、あなたじゃなくて、わたしがこういう不愉快な質問をしたフランス人だけに関係することだけれど。

フランス人が恥知らずだっていうのは、私も知ってるけど、誰だって欠点はあるものよ。でもそのことについては、これくらいでいいわね。ええ。私もフランスにいつか旅行して、あの美しい国土を見たり、私のフランス語を完璧なものにしたいわ。

またね、愛する人。また明日。

〈史料 6〉

1940年10月17日

あなたが機嫌よく、私みたいに順調にしていることを願っているわ。昨日の夜、トミー〔イギリス軍〕がブランケンベルヘ〔ヴェンドウイネから数キロ東に行ったところにある港湾都市〕に、爆弾を何発か投下したけれど、大した損害はなかったわ。あの時は堤防沿いの三つの邸宅が朝の4時から10時にかけて燃えた。夜の炎というのは素晴らしかったわ。昨日トミーは10時頃に上空を通過したけど、もう一度来ることはなかったわ。11時半から次の朝の7時25分まで寝たわ。イギリス艦隊がダンケルクにむかってすごい砲撃を加えて、一時間以上ドイツとイタリアの航空機がロンドンに向かって飛んでいったけど（不幸な街ね）、私には何も聞こえなかった。〔略〕

想像してよ！ 私がそこ〔閑静宮〕に行くといつも、（ドイツ人）労働者のリーダーが姿を現すの。彼は通りの向こう側で地下壕を建設していて、褐色の服を着ていて、カギ十字の腕章をつけてる。そして私にくだらないことを話しかけてきて、しつこくつきまとうの。——すごく卑猥で手荒だから、ある日ものすごく頭にきちゃったの。彼に噛みついて、引っ搔いて、ビンタを食らわせてやったわ。彼がその近くで働いている限り、もう二度とお城〔閑静宮〕には行かないつもり。もっと遠くで仕事をしてほしいものだわ。

それこそまさに、私がドイツ人の性格で醜いと思うところ（ああ、親愛なるあなたとか、あなたと同じような人びとはそうじゃないわ。でもあなたの同胞の半分はたぶんそうよ）。若い娘に対して、あまりにも態度があつかましいの。道徳的にひどいわ。ここ数日、一人で外出しようっていう気にならなかった。——でも心配しないで。私に何かしでかすまでには至ってないから。私はあらゆる言語で叫んでやった。そうしたら彼は私に手を出してこなかったわ。そうい

うことは、私の友達やフランス人、ワロン人〔ベルギー南部のフランス語系の人びと〕ならしなかったでしょうね。だからより一層あなたのことを愛してるし、私のそばで私のことを守ってくれればと願ったわ。

最愛の人。もしあなたが来てくれるなら、全部お話しするわ。だって、私はあなたにいったい隠し事しちゃいけないって思ってるから。一つだけお願いしておくけれど、この手紙は保管しないでね。でもあなたに誓って言うけれど、私は不正なことはいっさいしなかったし、あなたがいた6月からというもの、あなたを他の誰よりも優先してる。そして、私の名誉にかんすることなら、私は恐ろしくなれるし、ライオンよりも暴力的で、ひどくなれるってこと、私はいつもそれ〔名誉〕を傷つけられないようにすること、あなたは知らなくちゃいけないわ。ああ、できれば死にたい！

このはしたなくて恐ろしい話はおしまいにしましょう。現在は、コークまで簡単に行くことができる。でも想像してよ！ あなたの最新の手紙を取りに行ったとき言われたんだけど、局留め郵便を取りに来るには、私は若すぎるんですって。18歳以上じゃないと、って。あーあ！でも、あなたからの知らせ、もっと受け取りたいんですもん！——これからも同じ住所で送ってね。あなたが私のことちょっとだけ愛してくれるなら、困難も乗り越えていくから。親愛なるお兄さん。お休み、最愛の人。また明日。できることなら。

〈史料 7〉

1940年10月18日

グッド・モーニング、マイ・ディア・ブラザー。

すごくよく寝た。トミーは昨晚来なかったと思う。今日はすごくいい天気だし、大声で歌うわ。「幸せであるために、まだほかに何が必要？」でも私が待っているものといえば、戦争が終わることと、そしてあなた。今日の朝は田舎に行かなきゃいけないの。またあとでね。

〔略〕親愛なる友。あなたに手紙を書くとき、あんまりあれこれ考えたりはしないし、あなたには何も隠したくないから、ちょっと書きすぎていると思う。でも、嘘をついたり何かを隠そうとするのは無意味だと思う。だって私たちは兄弟・姉妹なんだし、お互いにすごくよく理解し合っているんだもの（政治の話を除けばね）。

私の9月末の手紙〔史料3〕はすごく意地が悪かったと思う。許してね、私のクルト。でもすごく心が痛かったし、あの時は考えが千々に乱れていたの。私があなたのことを疑ったこと、許してね。でも長い間あなたのこと疑ってたわけじゃない。だって、あなたは私と同じような誠実な人間だって、わかってるから。でもあなたもわかると思うけど、家ではみんな私に対して怒ってるの。ずっと私の悪口ばかりで、私は完全に絶望している。みんな私について陰口をたたいていて、嫌っているんだって想像してる。今そんな状態。私の性格がどんなに悪いかって、あなた分かるでしょ！〔略〕

最愛の人。戦争の終わりと勝利が待ちきれないわ。でも、あなたは死んじゃだめ。ダメよ。そんなことは望んでない。あなたが誇りに思う自分の祖国のために戦って。そうすべきよ。ああ、私も一緒に戦うことができればいいのに！でも、悪いことや残酷なことはしないで。だって、〔彼ら＝敵だって〕母親もいれば、子どももいれば、婚約者もいるんだから。そういう人たちが待っているんだっていうことを忘れない

で。ああ、この戦争が終わって平和が訪れて、私たちが一つになりますよう！ 私たちはみなきょうだい、互いに愛し合うべきだっていうあなたの意見は正しいわ。でも戦争が終わったら何があっても、ヴェンドウイネに戻ってきてね。ずっとあなたのことを待っているわ。とにかく私はあなたのことを愛しているから。わが親愛なるお兄さん。〔略〕

〈史料 8〉

ヴェンドウイネ 1940年11月13日

〔略〕ここ〔我が家〕では基本的に誰も私のことをわかってないの。私の両親はいつもいくぶん距離を置いていて、私のことをまったくわかってない。自分の考えをしゃべったことは、一度もないわ。彼らは私のことまったく理解できない。わたしはとても現代的な考えを持っているのに対し、彼らはすでにかんりの歳なの。お父さんは64歳で、私たちが考えていることに関心なんかない。ママは53歳で、祖母にすごく厳しく育てられた。舞踏会にいったことが一度もないの。想像してみてよ！ 彼女にとっては、16歳の少女が若い男に話しかけようとするのは、悪い振る舞いな。でも私たちが生きているのは1940年で、1905年じゃない。もうずっと昔の話よ。

基本的に両親は私のことをとても愛してくれるけれど、でも両親なりのやり方でなの。私が悲しいとき、心のこもった言葉をかけてくれたことなんて一度もない。優しさとか、愛情のこもった言葉なんて一度もないわ。そしてもう手遅れなの。彼らに自分の心を開く気はないわ。私の中で何が起きているのか、彼らは何にも知らない。ええ、わが親愛なるお兄さん。あなたは他の誰よりも、長いこと私のことを知っているわ。私の兄シャルルは31歳で、彼のことはそんなに見かけることがない。一年のうち多分一ヶ月くらい。いつも彼は海に出てるの。今彼は通訳として、あなたの国にいるわ。彼は、私たちとは違う考えをもっている、家族ではただ一人の人間。彼にとっての祖国は世界。私にとってはそれはベルギー。どうすることもできないわ。彼はいつも自分のやりたいことをやってきたし、あまりに長いこと家にいなかった。彼も自分なりのやり方で私のことを愛してくれてる。私、彼のお気に入りだとすら思う。でも基本的に彼は兄弟姉妹とはそれほど近くない。



ジョ〔ルジュ〕はいつもよく勉強してるし、私に腹を立ててる。だって、私はそうじゃないから（私の数多くある欠点の一つが、勉強が嫌いってこと。地理学の一部は例外で、いつも一番成績がよかった）。私がずっと嫌いだったフラマン語はそうじゃ「地理学みたいにきちんと勉強し」なかった。今となれば、それがわかるわ。私がバカだったの。でも、取り戻すのに遅すぎるってことはないわ。——今彼は結婚する予定。今月の27日。考えられる限りの幸せを願っているし、彼の奥さんを私のように苛立たせることのないよう願っているわ。人をからかうのが、彼のもっとも醜い欠点。

クリスティアンヌはすっごく行儀のよい少女で、修道院に入る以外何も夢見ていないの。彼女から見れば、私は地上でもっとも常軌を逸した、最悪の生き物ってとこね。だから私は彼女に、私の性格が変わるよう祈ってるの。彼女も私のことは決して理解できない。でも彼女とちゃんと折り合ってはいる。でも三人との間にはあまりにも大きすぎる年齢差がある。〔それぞれ〕15歳、12歳、そして10歳。あまりに大きな差よ。

だから残りは私のちっちゃな妹〔ギャビー〕だけ。彼女ともわかりあうことは不可能よ。彼女はたぶん私より多くの才能を持っているんだけど、私には我慢できない性格の欠点があるの。逆上しちゃう。彼女は、告げ口したり物事を悪化させる天才。ほんとにチクリ魔なの。誰に対してもいちばんひどいことが言える。そんなこと私にはできないけれど、〔正直〕ときどきは私もそういうところがある。

私の女友達について何か話したことは、一度もなかったわね。彼女たちは好きなようにやってるし、それは私も同じ。そして、私にはいつもたくさんの女友達がいたって誓って言えるわ。でも私は都市を離れたし、お母さんは

村の若い女の子のしつけが十分になっていないと思っている。私だってそれ（彼女たちのしつけ）に我慢がならない。あまりにもいい家庭に生まれたのが、私の間違いなのかしら？<sup>20</sup> 自分の両親が洗濯屋であるか、商人か、あるいは飲食店の主人であるかなんて、子どもに選べるんじゃない。そんなことはどうでもよくて、ただ私に親切にしてくれればいいの。友達が多ければ多いほどいいって思う。だって、人間はときおり、「自分よりも小さな人間を必要とするから」<sup>21</sup>。あと、私は高慢な人間だと思われたくない。だから私はいつでも、労働者でも店員でも仕立屋でもちゃんと話をするし、гентならソロリユス Soloyus 男爵夫人ともX伯爵夫人とも同じように話をするわ。私にとってはこちらも同じこと。それ〔高慢であること〕は我慢できない。だって、私は他の人と変わるところがないんだから。〔略〕

<sup>20</sup> クルトによれば、マリー＝テレーズの家族の先祖はベルギーの貴族であり、かつては多くの土地を所有していたという。Kurt, a.a.O., S.1-2. また、彼らの本来の住所はブリュッセルであり、ヴェンドウイネはいくつかある別宅のうちのひとつであったという（S.187）。

<sup>21</sup> ラ・フォンテーヌの寓話『ライオンとネズミ *Le Lion et le Rat*』からの引用。

〈史料 9〉

1940年11月16日

〔略〕昨日の夜、トミーがやってきて、ブランケンベルへとオーストエンデ〔ヴェンドウイネから十数キロ南西に行ったところにある、港湾都市〕を爆撃した。私は寝ていて、なにも聞こえなかった。かなり激しかったようだけど。昨日の夜寝る前、四階に上がって行って、演劇〔空襲の様子〕を見た。いつもと同じだった。数多くの投光器、赤い花火、白と緑、小さなカノン砲〔高射砲〕。すっごくきれいで、楽しかった。ときどき、大きなカノン砲も混ざるの。まるで、星が地獄のような音とともに破裂しているみたい。窓ガラスは揺れているけれど、でもそれだけ。嵐がない夜には、そういう公演が毎晩行われている。一年に二回以上は花火が見られない平時とは違う状況ね。

その夜はさらに波乱に富んでた。イギリスの艦隊がゼーブルッヘ〔ブランケンベルへからさらに数キロ東に行ったところにある、港湾都市〕のかなり沖合で発見されたようだった。すべての大砲が活動を始めた。ああ、なんという轟音。でもそれこそが私を興奮させるの。別の日には、投光器に照らされたトミーを一機みたわ。ちょうど家の上空だった。かなり速く飛んでた。それを見たときは……私も狂ったようになったわ。今のところ大きなカノン砲も混ざってるけど、〔敵に〕命中してない。一度、ゼーブルッヘ上空で撃墜された飛行機をみたことがある。緑の星が、海へと落ちていった。別の時はオーストエンデ上空で〔急〕降下してきて、地面すれすれまできたときに爆弾を投下、ぷいっとまた海の上を飛んでいった。爆弾は砂浜の上に落ちた。もうかなり昔の話だけど。今ではもはや8時以降には外出できない。

私たちに対する爆撃はあなたたちに対する敵愾心を煽っていると思う？ そんなことはないわ。私たちにとっては単なる気晴らしよ。いえ、正直に言うと、多くの人びとは不安を感じていて、自分の地下室で身をかがめてる。私

はそんなことしないんだけど。だって、死ぬってなったら、地下室にしようと三階にしようと爆弾は当たるんだし。私はイギリス軍にはなんの不安も抱いていないわ。彼らは民間人のことは爆撃しないっていう印象をもってる。彼らがその気になったら、ヴェンドウイネを存在しなくすることだってできるはずだわ。投下すべき場所を、きちんと見てる。だから、この危険に対して腹を立てないでね。戦争の時代には、ほかにももっと危険なことはいろいろあるわ。今日まで私はずっと幸運だった。これからずっとそうであってほしい。だって前にも話したように、〔運がなければ〕あなたが〔こちらに〕来る前に、私が爆撃で死んでしまうってこともあるかもね。でも、やーめ！ もう政治について話すのはやめましょう。私はあなたをとても愛しているし、この嫌な雲が私たちの間に壁を作ることなんて望んでいない。

あなたに言ったように、軍服姿のあなたのほうが好き。あなたと知り合ったとき、愛するようになったときその格好をしていたからっていうだけなんだけど、わが最愛の人。私のためだと思って、きちんと身ぎれいに着こなしてくれる？（あなたがだらしく、汚らしく民間人の服を着ているとは思いたくないけれど。絶対ダメ。そんなの大嫌いよ）でもあなたを見かける前に、他の兵士もみたことがあります。彼らもまた英雄だけれど、誓って言うけれど、あなたと比べて全然はつらつとしてなかった。もっとも、前線や戦闘から戻ってくると、真っ白な顔で（私は日焼けした方が好き）きちんとひげをそっている兵士っていうのはあんまりいないんだけど。清潔な手、申し分なく香水をつけた服、ピカピカのブーツなんていう兵士も。ああ、ありえない。ちゃんとした兵士の外見はそういうものじゃない。自分が生き残るために他の人たちを死へと追いやる人たちにとっては、それでいいの。そう、あなたも勇敢な兵士のタイプだったわね。国籍なんて関係ないわ。英雄はみな同じよ。

私は当時、あなたが大嫌いだった。私はあの瞬間、あなたをズタズタにしてしまうことにバカバカしい喜びを感じていたかもしれないし(もし私が若い娘じゃなくてライオンだったら)、あの時私の心は猛り狂っていた。そして私は自分の思っていることをすべてあなたに話した。あなたがそれを理解してくれたのは、大きな喜びだった。それから私は自分自身にこう言ったわ。「若気の至りね。なんという愚かなことを私はしたの!」。もしあなたがお望みだったのなら、私は歌うために雲にだって昇るわ。あなたはとっても人が悪そうな表情をしているし、あなたもっている武器のせいで、信頼に足る人間には見えなかったの。翌日道すがら、私はかなり不安だったけど、それ以降はもはや不安は感じなかった。そして月曜日、あなたが私にこう言ってくれたとき、私は大笑いしたわ。あなたもまた、私のことあまり信頼してないってね。その時から、私たちは人間同士として信頼し合えるって理解したの。だってあなたは、こんなに意地の悪いベルギー人の少女にやさしくしてくれたんですもの。そして私は、あなたに嫌なことをしようとは少しも思わなかった。今はあなたの国の同胞に対してもそれほど敵対的ではないし、彼らの挨拶にも返事をするわ。だって、全体としては彼らはいい人たちなんですもの(もちろん、あなたほどじゃないけれど)。もっとも、彼らの挨拶に返事をしないと、彼らはその人を嘲ってくるの。だから私は返事をする。敵を持つより友人を持つ方が、はるかに価値のあることよ。

でもだからといって私の政治的意見は変わらないわ。そしてもし彼らがそれを「言えと」要求するなら、私もそれを隠しはしない。そうすれば、彼らは私を放っておいてくれる。

〈史料 10〉

〔ヒトラーが 1939 年 9 月 1 日、対ポーランド戦開戦にさいして行った演説を、フランス語に翻訳してマリー＝テレーズに送付〕

ヴェンドウイネ 1940 年 11 月 18 日

私の 1940 年 11 月 11 日の手紙を受け取っているといいんだけど。私に書いてくれたすべての手紙に感謝してます。だって、あなたが長い手紙をフランス語で書いてくれたこと、ごく自然なことだと最初は思ってたの。でも、それってあなたにはすごく大変だったんだって、ようやくわかったの。だって、あなたが最後の手紙で言ってるように、私がもし英語で書かなきゃいけないってなったら、果てしない時間がかかるわ。私の英語よりあなたのフランス語のほうがずっと上手だし、あなたはかなり進歩したわ。あなたが考えていること、とてもよく理解できます。私、もう授業は受けてないから英語は忘れちゃった。私はもうそれ〔英語〕が話されているのをほとんど聞いたことがない。読むのはたしかにかなり簡単だけれど。

今のところ何とか、ドイツ語とフラマン語のようなものをしゃべってみようと努力はしている。でもあんまりうまくいってない。ドイツ語で書くのは無理そう。

政治について私に関心を持ってくれてありがとう。それを私に送ってくれて翻訳してくれたのがあなただから、そのためにあなたがすごく苦勞したからこそ、私はそれを読むけど、それはあなたを喜ばせるため、そしてわたしはあなたには従う気がある(あなただけよ)ってことを示すためだけよ。そうじゃなかったら、それを私に読ませようってするのが他の誰かだったら、翻訳を手にとって火の中に投げ込むでしょうね。だって不幸なことに、それはあなたにとって真実に見えるのよね。かわいそうな最愛の人。嘘以外の何物でもないのに。ああ、あなたはいつになったら目を開くのかしら、親



愛なる目くらさん<sup>22</sup>？ いいえ。安心して。このこと誰にも話さないし、決して誰にも見せないわ。あなたとのことは、私たち二人以外には誰にもわからない〔略〕。

でも私たちの問題に戻りましょう。ええ、戦争が終わって私たちが再会するとき（あなたが私のことを忘れていなければ）、このことについて議論しましょう。そしてすべてのことについて、私はあなたに話すつもり。5月、6月に、私の考えていることをすべて話した、あの時のように（ああ、あなたは素晴らしい話を聞くことになるでしょうね）。

いいえ、私のクルト。この前のあなたの手紙は私を傷つけたりしていません。私がただ思ったのは、あなたは私のこと少し好きじゃなくなったんじゃないかってこと。だって、遅かれ早かれそういうことになるだろうし、数年後にふとあなたのベルギーの愛おしい〔小さい〕妹を思い出すことになる〔程度のこと〕でしょうから。その子はあなたのこと決して忘れないのに。そして私は再び忘却の彼方に沈んでしまうの。〔略〕

将来については考えないようにしましょう。ああ、将来っていうのははるか先だわ。それまでに、いろいろなことが起こるでしょうね。戦争が終わるまでにひょっとしたら私も死んでいるかもしれない。だって今のところ私たちはまだ生きているけど、あなたも私も同じような危険のなかにいる。飛行士とか船員の話をしているんじゃないのよ。でもあなたが船でイギリスに行かない限り、私もあなたも同じくらい危険な状態にあるわ。だってイギリスに関して言えば海岸は最前線だし、だから私たちのことを彼らはほとんど毎晩爆撃している。ベッドに横たわるとき、次の朝目覚められるかどうか、私にはわからない。そんなことがありえないってわけじゃない。だって一ヶ月前、ヨークである

家族が全員邸宅の中で死んだんだもの（それほど遠くないところに投光器があった）。ここでも、私の家から投光器はそんなに離れてない。鳥がひゅんとひとつ飛びするくらいの距離。もしくは、軍用地で散歩したら射殺されてしまうかもしれない（どっちの方向に行っても同じで、軍用地しかないから）。もしくは、自分の考えていることを言ったという理由で〔射殺されてしまうかもしれない〕。〔略〕

私はあなたを愛しているし、あなたは私を愛している。それ以外のことは忘れましょう。将来はまだずっと先。

でもあなたは私よりずっと賢いわ。私が誤りから目を覚まさないことを、あなたは望んでいないでしょう。私のお兄さん。将来のことを考えるには私はまだ若すぎるし、あなただってそう。あとであなたはそのための時間がたっぷりあるでしょう。今のところ、私はあなたの小さな友人、あるいはそれ以上の、妹っていう存在。そしてあなたのことをとても情愛をこめて愛してる。それ以上のものは必要ない。そして時間がたてば、たぶんあなたは私のことをほとんど愛さなくなる。そんなものよね。それが人生っていうもの。すべては過ぎ去っていくの。もしあなたが将来大学生になりたいんだったら、ときどきは、あなたのことを心からずっと愛しているあなたのベルギーの妹を思い出してね。大学生になるとたくさん勉強するんだろうけど、気晴らしも必要よ。どんどん楽しんだり、笑ったりする。若者はみな同じだし、それは正しいことよ。だって、若さは一度きりなんだもの。そしてあなたは私のことを退屈だと思えるようになるでしょうね。私はつねにあなたの妹でいつづけるつもりだし、あなたが大学で持つような（戦友ではなく）よい仲間の一人にいるわ。そしてもしあなたが人生の伴侶を選んだら、私があなたの遠く離れたところにいる友人でいつづけてくれることを望んでくれるのを願っているわ。そして私たちの若い頃の友情を

<sup>22</sup> 史料の表現をそのまま表記している。

しっかりと保つために、祝日には絵はがきを書いてくれることも。そうすれば、あなたに約束したように、あなたの忠実な友達でいつづけることを約束するわ。〔略〕

でも、あなたがフランス人女性について書いたことが、私には信じられません。いいえ。それは事実ではありません。〔身持ちの〕悪い女性はどこにでもいますが、〔そういう女性は〕良家の出身ではありません。それはありえないわ。フランス人は性格的に気楽ですごく束縛を嫌うけれど、性悪ってことはありません。上の階級になればなるほど、彼らは冷淡で物静かになるわ。でも表面的な物静かさをそのまま信じちゃだめ。ふつうそれは猫かぶりであり、おぞましいことよ。私はそういう人間ではないし、〔誰かに〕そうされることもない。私は自由で、誰にも従わない。とくにこの点については。〔略〕

ええ、わが最愛の人。私は戦争を嫌悪するし、すぐに終わることを望んでいるわ。だって私はもはや5月の時のような悪い子じゃないから！あなたたちはみな人間よ。イギリス人であろうと、ベルギー人、フランス人、ドイツ人、ノルウェー人、中国人、セネガル人などなどであろうと、それが何だというの。みんなあなたがたのことを〔故郷で〕待ちわびているんだし、しばしば泣いたり、不安に思ったりしてる。あなたがたはみな母親をもつ息子なの。人種や肌の色が何だっていうの？〔略〕

〈史料 11〉

ヴェンドウイネ 1940年12月15日

わが親愛なるお兄さん

クリスマスが近づいてきたわ。一年で一番うつくしい祝祭ね。ああ、この美しい日に、不幸なことにあなたは自分の「ホーム」から遠いところにいるのね。でも、楽しいクリスマスのお祝いを願っているわ。この日にあなたが戦友たちとちゃんと楽しめるといいわね。

〔略〕私が閑静宮に行ったとき、地雷が二つあった。両端に一つずつ。それでも私は一時間そこにいたし、どちらも爆発しなかった。これからもうしょっちゅうは閑静宮に行かないつもり。だって、指揮官が浜辺や堤防、砂丘への民間人の立ち入りを禁止したから。来週まだ通りに行くことができるのかしら。私の一番親しい親友である海や砂丘に行けないのが私にとっては耐えがたいことだっていうのは、理解してね。

だから、よきベルギー人である私は、私なりのやり方で〔命令に〕従うわ。でも想像して。私が閑静宮に行ったり、通りの片側を歩いているといつも、マツでうまく偽装されていて、有刺鉄線で囲まれた宿営地にいる兵士たちがやってきて、そこから降りろと命令するの。周囲で起こっていることを見るのは禁じられているって。でも、彼らは有刺鉄線の外に出ることができないから、〔それをいいことに〕私は彼らを〔土手の？〕上からあざけて、そしてとても友好的に挨拶するの。でも、この意地悪な人たちがいつか出てきて、閑静宮に行くのを禁止するんじゃないかって心配。今はもう通りの片側に行くことはしてなくて、浜辺の脇を通ってる。許可を求めたわけじゃないけど、そうしたっていいでしょう。だって……。

私たちは待ちきれぬ思いで、(私が望んでいるように)これらの禁止令を撤廃してくれる新しい指揮官を待ち望んでいます。そうならないのなら、「身分証明書」を申請することになる

でしょう。私は漁師になりたいわ。だって、食べるものが何もないんですもの。でも、もう少し待ってみます。今海に行くには、あまりにも寒すぎる。

最愛の人。あなたが私の最後の絵はがきを受け取ったとき、おそらく驚いたでしょう。でも聞いて。前の手紙で書いたように、私はゲントにいたの。そのときあなたの手紙を私は持って、肌身離さず持ち歩いた。私が〔ゲントに〕滞在した一昨日の夜、私は一番上のお姉さんと一緒に寝なくてはいけなかったの。そのとき私は手紙をこっそりと、休暇の時の昔からの友達の手紙の後ろに隠したの。そのとき、私づらかった。だって想像してほしいんだけど、次の日姉さんが私の鞆を調べて、私から手紙をだまし取ったの。ヴェンドウイネに帰ってきてから鞆をひっくり返してみた。でも手紙はどこ？ どんなに腹が立ったか、あなたわからないんじゃないかしら。だって、ドイツが私の手紙を検閲するってだけでももう十分なのに、私の家族がさらにそれに追加で検閲する権利なんてどこにあるというの。三日間神経をすり減らしたあと、私の新しい義理の姉のところに行って、自分の思いをぶちまけたの（手紙がドイツ人宛てのものだっていうことは彼女には言わなかった<sup>23</sup>）。ええ、わがもっとも忠節なる友。できる限りのことはするって、彼女は約束してくれた。別の日に、姉が私の手紙を持っているってこと、彼女がたくさんの手紙を読んだってこと、それを私に戻す気はないってことを知らせてきた。だから私は彼女の部屋をしらみつぶしに探して、やったわ、ある素晴らしい朝にそれを見つけたの。そして幸いなことに、ものすごい意地悪さん〔姉〕は手紙を開封していなかったの。私は手紙を手にとって、すぐに郵便箱に投函したわ。だから、手紙はこんなに遅れたってわけ。

〔略〕姉さんは今でも、私が手紙のやりとり

をしている相手はベルギー人相手だって思っているし、手紙を私に返さなければ私をいらだたせることができるって思ってる。

ここではすべて順調よ。前線についてはなにも報告することがないわ（マジノ線についてフランス人がよく言っていたようにね）。でもときどき「トミー」がやってくるわ。もう慣れたけど。ただ私が気に入らないのは、夜にベッドで目が覚めたり、朝8時半に起きたりすると、決まっていたいつでも航空機のエンジンが轟音をたてたり、大砲が連射されたりする音が鈍く響いているってこと。うんざりだわ。仕事を一生懸命やりすぎなんじゃないかしら。すべてが終わるまで、ベッドから起き上がろうとは思わない。お母さんはすごく怒ってるけど、「トミー」がそこにいる限り、「おねんね」するには最適な時間だと私は思うわ。もっとも、ドイツ時間で10時（ベルギー時間だと8時）になるまでは、まだ明るくないの。一日はあまりにも長く、生活は単調よ……。〔略〕

<sup>23</sup> この文面からは、おそらくクルトから送られた手紙と、クルトにこれから送る手紙の両方が姉によって隠されたことが推測できる。



## 〈史料 12〉

ヴェンドウイネ 1941年1月4日

今日の午後、あなたの手紙を受け取ったわ。どれだけそれが私を喜ばせたか、あなたには想像できないでしょうね。だって、あなたから最後の知らせを受け取ってから、もう何ヶ月も経つんですもの（たぶん10月以来ね）。もちろん、一週間ごとに手紙を書いてなんて言わないわ。いいえ。でも、たとえば2ヶ月に一回くらいは。それなら大変じゃないでしょ。ちょっとした絵はがきでいいの。そうすれば、あなたがまだ生きていて、十分健康に暮らしているってことがわかるんだから。そうでないと、私はありとあらゆることを想像しちゃう。〔略〕

## 〈史料 13〉

1941年3月10日

1941年2月16日のあなたの手紙がどれくらい嬉しかったか、あなたには想像できないでしょうね。これほど心のこもった手紙を受け取ったのは、どれくらいぶりかしら。あなたは、私の元を去った時と変わっていないわね。私の思い込みが正しいのかどうか、私にはわからないんだけど。とにかく、ありがとう。あと、写真もありがとう。本当に以前と全然変わっていないわね。〔略〕

家で家族たちは、私は頭がおかしくなったって思っている。あのね、最近いちばん上の姉と言い争いしたの。彼女が主張するには、人間は大いなる苦痛よりも大きな喜びによって死ぬ可能性が高いっていうの。私はその正反対を主張した。人間が死ぬ理由は、大いなる苦悩によるものだと思ふ。あなたはと思う？ あなたに会えるのが嬉しいあまり、あなたの腕のなかで死んでいる私のこと、想像できる？ ありえないと思うわ。あまりにも奇妙な話じゃないかしら。

でも、もうちょっとまじめな話をするわね。私の送った写真で喜んでもらえて、とても幸せよ。あとでまた別の写真送るわね。私の手紙を喜んでくれたのも、とてもうれしい。でも私だって同じよ。あなたの手紙が私にとってどれくらい喜びの源泉であるか、あなたには想像もできないでしょうね。郵便局の〔嫌な〕奴の邪険な態度や、そのせいでいつも（どんな天気でも）営業時間が終わるまで5～6回はコークの郵便局まで往復させられることだって、どうってことはないわ。そしてついに、優しい太った女性が……あなたの手紙を（あればの話だけれど）私に渡してくれる。そうすると、私はすべてを忘れて、大急ぎで砂浜の狭間で横になり、あなたの才気に満ちた言葉を読むの。それから目を閉じて、私たち二人がマツの木の下に潜り込んで一緒に過ごした、あの日を

思い出すの。そして、あなたがその場にいると想像する。私は頭をもたれかけたあなたの肩を感じるの。するとあなたは私にキスをする。でもそれは素晴らしい幻影にすぎなくて、私は悲しい現実に戻される。私はひとりぼっち。私の声が発するこだま、私の影、美しい自然、マツ、鳥、そして波がつくりだす単調な歌に囲まれて、私はひとりぼっち。

でも、あなたはどこにいるの？ 私がただ一人本当に愛する、あなた。私から遠く離れた、フランスの奥深くにいても、あなたはときどき、私のことを考えてくれてるわね。でもあなたはまた戻ってくるわ。私はそれを望んでる。あなたはまた戻ってこなきゃいけない。いや、あなたが戻ってくるうえでの全ての障害は取り除かなければいけないわ。まあ、あなたが、フランスにいる限り、あなたの暮らしについては何も心配していないんだけど。ええそうよ、かわいいフランス人女性のことよ！ でもあなたのことを信頼しているわ。そもそも、あなたが何をしようと自由なのではないかしら。そして、私もやきもち焼いたりしたくないし。いいえ。私はこの「嫉妬という」重大で恐ろしい欠点を、私の心から死滅させたとと思う。人を愛するのならば、偉大なる友の幸せを望むべきよね。だから、あなたは楽しんで。心配事や悲しいことも忘れて。でも、少しは私のことも考えてね。

でもあなたはちゃんと私のこと考えてくれているわよね。バカなこと書いたわ。ごめんなさい。ええ、あなたは疲れているし、あなたを邪魔する戦友もいるけれど、こんな素敵な手紙を書いてくれたように、私のことをまだ愛してくれている。〔略〕

親愛なるクルト、去年の5月よりは確実に多くのことを私は理解するようになっていきます。でも私の原則、私の根本的な考えは変わっていませんし、ますます勝利を確信するようになっていきます。

こんなによく議論できるのに、あなたから遠く離れているというのは不幸なことね。〔ともあ

れ〕それらすべてにかかわらず、私がかかなり譲歩したということも、あなたにはわかるでしょう。とくに私が感嘆するのは、あなたがた「ドイツ人の」規律、誠実な戦友意識、そしてあらゆる身分の違いの撤廃です。だってここ「ベルギー」では、すべてが昔のままなんですもの。変化することが必要だわ。たとえば想像してみてほしいんだけど、お母さんはここで女の子の友達をつくることを私に禁じているの。あの子たちはあまり洗練されていないし、いいところの家の出身じゃないからって。でも、私はそれを聞いて怒ったわ。いいえ、私が彼女たちより優れた人間だなんてことはないし、デント出身で最上級の貴族出身の女の子を私も知ってるけど、労働者の女の子よりも道徳的に優れているなんてことはないわ。だから、こんなこともやめるべきだし、あなたがたの政府が優れているのはその点よ。ほかにもいい点に気づいたわ。それは簡素さ。ほとんどのベルギー人やフランス人の一部すらも、そのことを完全に忘れていると思う。「スノッブ」なのよ。この英語、フランス語に定着した英語の表現をあなたも理解できると思うけど。〔略〕そしてあなたたちの国では、ここベルギーでは決してありえないような規律があるのよね。それにたいしてここ「ベルギー」には、規律がないし、反抗的よ。

誓って言うけど、私は自分の人種のとても気品のある代表なの。私にあれこれ禁止する人間には、災いが起こればいいわ。私は、それ「禁止されたこと」の正反対をやってやるんだから。ときには私も従うけれど、でもそのために必要なことは、私に助言してくれようとしてくれる人をとっても愛しているっていうこと。そして私は命令は決して受け入れないわ。私があなたに従うのは、あなたは私に命令したりはしないからよ。〔略〕

〔この後、クルトは独ソ戦に備えて東部地域に移動し、(東プロイセンのティルジット [現ロシア領ソヴェツク])、しばらく文通が途絶える。〕

〈史料 14〉

ヴェンドウイネ 1941年5月29日

ええ、最愛の人、私があなたに出会った素晴らしいあの日から、一年が経ったわ。この一年、毎晩毎朝あなたのことを考えていた。一日の最初と最後は、あなたに想いを捧げてきたわ。この一年、あなたは偉大なお兄さん、いや私にとって一番大切な存在だわ。あなたに比べれば、いままでの私の友人〔男友達?〕も最近の友人も色あせたものだし、あなた以上に大切なものなんて存在しない。あなたは手紙の中で、あなたが私の友達の一人だということ、私があなたのことを信頼できるということは幸せなことだって書いてくれたわね。いいえ、あなたは単なる友達じゃないわ。あなたはそれ以上の存在よ。あなたは私にとって最高の人。私がいままで出会ってきた人たちのなかで、国籍を問わずいちばん私が信頼するに値する人よ。国籍なんて関係ないわ。国民 Nation がなんだっていうの。私がとても愛しているこの国であっても、若者はみんなあまりにもスノッブだし、軽薄よ。でも、みんながそうだって言いたいわけじゃないのよ。あなたはあくまで通例の中での例外だと思う。だってあなたの同胞は恐ろしいほど軽薄なんですもの。彼らは若い女の子たちと楽しそうにべちゃくちゃ話しているし、彼らの言うことなんて信用できないわ。その点気をつけなくちゃね。でもどの国でも状況は同じだと私は思う。結局私たちは弱い人間でしかないのよ。

でも運命が私に明らかにしようとしてくれたことがある。それは、ここでの人間としての暮らしもすべてがよくないというわけじゃないってこと。そして、私が人間の価値に対して絶望したりすることも、運命は望んでいない。だからこそ私はあなたに出会ったのよ。ああ、あの時はあまりにも素晴らしかったわ。あなたのそばにいられて、あまりにも幸せだった。でもその絶頂にいたのに、あなたがいなくなって初めて、



自分が幸せの頂点にいたってことに気づいたの。それから私はずっと、自分がいかに愛想がなかったか、悪意ある態度をとっていたかについて後悔してきた。あなたや、あなたの仲間たちに対してひどい態度をとったわよね。でも、どうしようもないわよね。私はピリピリしていて、自分の神経を抑えることができなかった。何かあればすぐに頭に来るっていう状態で、自分自身へのコントロールも失ってた。私ができることといえば、あなたと出会ったことについて神様に感謝することくらい。もし出会ってなければ、私はいったいどうなってたんでしょうね。でもある面では、必ずしも悪いことだとは思ってないの。だってそのおかげで、あなたは欠点も含めて私の性格についてきちんと知ることができたんですもの。だから、あなたは私に対して一度も幻想を抱いたことはないでしょ。だってあなたと一緒にいると、私は心から自然体でいられるんですもの。もはや、数ヶ月前までみたいなスノッパなベルギー娘じゃないわ。まあ、ときどきは気取ったり、軽率だったり、子供じみたこともするけれど。でも、どうしようもないのよ。ベルギーでうまくやっていこうと思えば、そうするしかないの。そうしたくはないけど、戦争中はできる限りシンプルにやっているわ。都会に戻ったら、私の同級生や女友達は、私のことをまるで野蛮人であるかのような目で見てくるかもしれないし、私のことを笑いものにしようとするかもしれない。でももしかしたら、彼らだって自然である方がずっとましだってことが、やっと分かるかもしれない。いままでやってきたように、イギリス人やフランス人の猿まねをする必要はないんだってね。まあ、彼女たちも今まで通りベルギー人であることには変わらないんだけど。私たちはほかの国民と同じくらい、価値ある存在なのよ。

〔略〕

〔あなたは〕どこにいるの？ 私にはわからないけれど、あなたはまだ元気にやってるわよね、ダーリン！ 私がどれくらい不安に思っているか、あなたにはわからないわよね。あなたから知らせがなくなって、もう3ヶ月も経つよ……、2月から。何日間も、不安で心が張り裂けそうで、病気になりそうだった。それが4月の19日。この日は私はぎよっとするほど敏感で、ギリシアではたくさんの死者が出たっていう話をラジオで聞いた<sup>24</sup>。そのことで私は頭がいっぱいになって、すさまじく感傷的な厭世観に襲われたわ。悲しい音楽を聴いて、一晩中泣いた。次の朝はひどい咳が出た。咳込んで、私の目や鼻は噴水みたいだったわ。雨が降っていたし、だから偏頭痛と微熱を口実にしたの。そこで突然聞こえてきたのが、「待ちましょう」<sup>25</sup>だった。それがあなたの答えなんじゃないかと思った。また希望がわいてきたの。そして今私は待っているし、希望を持っているし、願いを持っているわ！ 健康な状態のあなたに再会したいものね。あなたのことを守ってねと、毎日神様にお祈りしてる。親愛なる人！ あなたにはきっと何も起こらないわ。愛する人！ 手紙書いてね。私、そんな感じでとても不安なの。〔略〕

〔この後、7月1日付けのマリー＝テレーズからの絵はがきを最後に、戦時中は文通が途絶える〕

<sup>24</sup> この時期は、枢軸軍によるギリシア侵攻の最終局面にあたる。ギリシア軍司令部は、4月24日に降伏した。

<sup>25</sup> “J'attendrai”。リナ・ケティがディノ・オルヴィエーリのカンツォーネ「Tornerai」（君は帰って来るだろう）をフランスのシャンソンに変えて歌ってヒットした。